

月刊

# いじろのとも

第十卷

六月号

## 不殺生戒が守れず

国家・民族・宗教が  
エゴを主張して  
世界中で  
テロや武力行使を  
横行させている

二千五百年前の  
不殺生戒という  
釈尊の教えが  
未だ  
守れないとは

## あるがままにある

あるがままにある  
とは  
人間が  
居直って  
悪を為すことを  
是認するものではない  
どこまでも  
反省がいる

# 人生を考え直して

## みたい人は（六五）

『正法眼蔵』解説（九）

現成公案を続けます。

人の悟りをうる、水に月のやどるがごとし、月ぬれず、水やぶれず。ひろくおほきなるひかりにてあれど、尺寸（しゃくすん）の水にやどり、全月も弥天（みてん）も、くさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。さとりの人をやぶらざること、月の水がうがたざるがごとし。人のさとりを野礙（けいげ）せざること、滴露（てきる）の天月を野礙せざることし。ふかきことはたかき分量なるべし。時節の長短は、大水小水を検点（けんてん）し、天月の広狭を弁取すべし。

例によって、参考までに玉城康四郎氏の現代語訳をあげておきます。

人が悟りを得るのは、たとえていえば、水に月がやどるようなものである。月もぬれず、水もやぶれ

ない。悟りも月も、広く大きい光ではあるが、小さな器の水にもやどる。月全体も大空も、草の露にもかげをおとし、一滴の水にもうつる。悟りが人をやぶらないことは、月が水をうがたいようなものである。人が悟りをさまたげないことは、一滴の露が天空の月をそのままやどすようなものである。しかし、水が深ければ天空の月も高い。人によって修行の時節の長短がある。したがって、それぞれの自覚において、水が大きいか小さいか、天空の月は広い

か狭いかを、よくよく調べ弁えるべきである。今回も、結構、難しいと思います。玉城康四郎氏の訳では、もうひとつピンとこないように思えます。

この部分の主題は、悟りを得るとはどういうことなのか、ということですが、それは、「水に月のやどるがごとし」だというわけです。

私は、これを読みますと真言密教の念誦次第（ねんじゆしだい）に出てきます、次の文章を思い出します。それは、入我我入観の一部ですが、「本尊、我が身に入り玉う。我、本尊の御身に入る。譬えば、多くの明鏡のあい対して互いに影現涉入（ようげんしょうにゆう）するが如しなり」です。

つまり、悟りの境地は、我がこころを鏡に譬（たと）

えますと、そこに映り込んだ仏さまであり、それは、また、仏さまのころにも自分が映っているということでもあるということ。両者は一体不離なのです。

道元のこの部分の記述も、水にうつった月を譬えとして、そのことを言っているのです。

玉城氏の訳がピンとこない部分は、本文で言いますと、特に、最後の三行です。「深きことは、高き分量なるべし。時節の長短は、大水小水を検点し、天月の広狭を弁取すべし」という部分です。

ここに至るまでの部分は、本文や訳を読んで頂ければ、意味の取れないところはないように思えますので、説明は省略させて頂きます。

ところで、最後のこの部分は、どの解説書をもても、なるほどと納得できるものではありませんでした。それぞれが、それぞれに解釈していて、定説がありません。ということ、とても抽象度が高く、意味深長だということだと思えます。

まず、「深きことは、高き分量なるべし」ですが、深いといえますのは、映る（あるいは映す）水の深さです。高いといえますのは天の高さでしょうから、仏教に即していいますと、深いのは私たち人間のこころの状態でしょうし、高いのは天（宇宙）に居られる仏さまの高

さだと言えます。

では、深いこころとは、何のことでしょうか。それは、私の理論で言いますと、無意識（潜在意識）のことだと言えます。修行によって、自己意識を絶対否定して到達する深い世界が、無意識なのです。

ここからは信じて頂く以外ないのですが、そこに至ることが、実は、悟りを得ることだ言えますし、そうなることが、仏さまの広大さを実感し、自分を宇宙根源の原理だと感じることもあるのです。高さということ言えば、それは、この全宇宙を包含する高さなのです。これを実感することが「深さが高さの分量」という意味なのです。

次に、「時節の長短は、大水小水を検点し、天月の広狭を弁取すべし」という部分ですが、ここも、悟りのことを述べていると考えられますので、時節の長短とは、悟りに至る時間の長短だと言えます。

それは、「大水小水を検点し、天月の広狭を弁取す」ればよいというわけです。では、「大水小水」とは何のことでしょうか。それは、映す水の大小だということですから、人間で言いますと、それは、映すこころの大小ということ。それは、こころがどれほど仏さまを信じているか、ど

れほど仏さまを求めようとしているか、だと言うことです。ひたすら信じ、ひたすら求めようとすれば、自然と修行の動機が高まります。そうなりますと、ひたすら修行することができるようです。ひたすら仏さまとその教えを信じ、求め、修行するとき、たとえ悟りに至らなくても、既に無限に仏さまに近づいているのだと、私は、思っています。

ですから、自分がどれほどそうしているかを反省しなさいと言っているのです。

次に、「天月の広狭を弁取」するとはどんなことでしょうか。天の月は、天（宇宙）に居られる（偏満されている）仏さまですから、その広狭を弁（わきま）えろということですが、広狭とは、広いことを言っているのだと考えられます。ですから、それは、仏さまの広さ、大きさを弁えなさい、ということなのです。

阿弥陀如来の別名は、無量寿如来、無量光如来です。仏の大きさは無量・無限なのです。ですから、仏さまは、人間（精神）をはじめとして、「物質」も「生命」も、あらゆるこの世の相対な存在を包み込む無限の広さをもっておりますのです。

そのことを、単に頭で納得するだけではなくて、こちらの底から、腹の底から知らなければならぬ、といっ

ているのです。それが、「天月の広狭を弁取すべし」ということなのです。

かつて釈尊のご在世の頃、経典はおるか自分の名前さえ覚えられないお弟子さんの一人の周梨槃特が、釈尊を信じ、その教えの通り、ひたすら修行に励んだ結果、悟りに達しましたが、それは、「あたま」で知るだけではないで、こころの底から知らなければならぬ好例だと言えます。

こうして「大水小水を検点し、天月の広狭を弁取す」とするとき、悟りに至る修行の時間は短くなっていくのです。それを怠るとき、いつまでたっても、修行が完成しない、あるいは、修行になつていないと言えるのです。前にも述べました通り、たとえ解脱に至らなくても（至れる人は極めて少ないのですが）、ひたすら修行するとき、悟った人と同じように、悪を為さず、善を為して生きていくことができるようになるのです。

なお、罫礙（けいげ）の罫という字は、テキストでは右下のトという字のないものなのですが、ワープロにありますので、この字で代用させて頂きました。また、検点の検という字は、テキストでは手へんになっていますが、同様の理由で、やむなくこの字で代用させて頂きました。

## 自作詩短歌等選

### 未熟で老化

人格が未熟なまま  
老化した人が  
周辺に目立つ  
それを  
人格障害と  
呼ぶべきか

### あへへへの世

ロボットのペットを  
疑似ペットと呼ぶ  
いま  
人間が物化し  
ペットも物化し  
物が精神化している

### こころの平安

欲望は  
満たした瞬間から  
もう  
渇きが始まっている  
そんなものを  
どんなに追求しても  
こころの平安は  
こない

### エゴを満足させる

いまの世は  
エゴを満足させ  
いやすことばしか  
受け入れられない  
精進を求めたり  
忍耐を求めたり  
持戒を求めたり  
布施を求めるとような  
ことばは  
死語になりつつある

### キレを抑える

キレる子の  
怒りを抑える  
プログラム  
アメリカでいま  
評判とやら

### 平等一味とは

無意識の  
自他の統合  
それが  
平等一味

## 平等と選好・損得

選好と損得で  
行動することは  
平等原理に反する  
たとえば  
教員が  
選好と損得に  
基づいて  
つまり  
美醜や  
ごますりの仕方  
生徒の点数を  
つけたら  
どうなりますか

もし

政治家がそれで  
動いたら  
どうなりますか  
世の中に平等など  
実現される  
わけがないですね

## 完全な自由と友愛

「完全な友愛」  
自分より貧しい者や  
不幸な者がいれば  
どこまでも  
分け与え  
世話し  
援助する

「完全な自由」

自由に競争し  
適者が生存し  
自然淘汰が  
行われる世界  
せいぜい  
公共の福祉に  
反しない限りという  
但書がつくだけ

平等は

そのバランスを  
はかること

## 自己肥大・閉鎖社会

いじめも  
不登校も  
当事者以外の人には  
みんな「他人」事

一方

当事者たちは  
ことの責任を  
すべて  
「他人」の  
せいにする

他人の痛みへの  
無関心  
そして

すべての責任の  
他人への転嫁

自己肥大し  
自己閉鎖した社会の  
精神病理

# 自作随筆選

## 自力と他力

先日、私のゼミ生の一人が、『文藝春秋』の六月号にこんな記事がありましたと言つて、コピーを取つて来てくれました。それは、今度、東京都知事になった石原慎太郎氏と売れっ子作家である五木寛之氏との対談でした。その表題は「同年同月同日生まれの初対談 『自力』か『他力』か」というものでした。

あのタカ派と言われる石原氏が政治の舞台に再び登場したことに不安をいだいていたことと、『他力』という本がベストセラーとなり、その本の広告を見て、こんな本が売れることに危惧の念をいだいていましたので、さつそく読んでみました。ああやっぱりそうか、と納得しました。

納得したことと言いますのは、二人ともが、共に、強い「自己肥大」に陥っているということです。

例えば、五木氏についての発言では、次のようなものがあります。

「（五木）つまり宗教というのは、本来非常に危険な

もので、『汝の敵を愛せ』なんてことを原理主義的に実践したら、とんでもないことになってしまう。けれども、その言葉があることで、人間がふと自分の良心を取り戻して、自己を恥じる気持ちが生ずる。ですから宗教というものは、あえて実行できないことを言う。その言葉があることが大事なんです。逆に言うと、宗教の言葉は反社会的でなければならぬ。ノですから道德のかわりに宗教教育を、などと軽々しく言い出すのは問題じゃないでしょうか。」

これを読みますと（この人の書いた『他力』の本の新聞広告を見ても、そう思っていたのですが）、この人は、「本當の宗教」のことが、全く分かっていないと思えます。どうしてこうなるのかと言いますと、それは、自己を肥大させ、自己への執着を強めているからなのです。

本當の宗教は、どの宗教も「自己への執着を捨てるべき」ことを説いていますので、この人は、本當の宗教からは、まったく遠いところにいることになりました。この人が言うように、道徳なぞ説いてみたところで、説かないより多少ましかも知れませんが、もつと根源の宗教をないがしろにしているのは、ほとんど効果は期待できません。こうした有名人をはじめ、大多数の人が自己を肥大させ、「信」を失っている今、まさに、宗教教育こそが、

必要なのです。

次に、石原氏の発言を見てみたいと思います。同氏は「ゴーマニズム宣言」と思える発言を方々でしています。が、幾つかだけあげておきます。

いま取り上げました五木氏の発言のすぐ後に、次のような発言があります。

「(石原)五木さんの言っていることと僕の言っていることは、ちっとも食い違っていない。ただ、全然重ならないんだ。なぜかという、五木さんは信仰、そしてそれを集めた宗教という、とても大きなベクトルで話しているでしょう。/僕の場合はね、全く自分個人の問題、哲学の問題でしかない。非常にセルフイッシュなんです。五木さんは宗教というものから人間を捉え、様々な歴史の例を、信仰の姿、紆余曲折、麻原の話も出てきたけど、非常によくわかった。ところが僕は、所詮エゴイストだね。」

また、この発言の少し前に次の発言があります。「(石原)僕はなんで日蓮のことを書かなかったのかというと、傲慢に聞こえるかもしれないけれど、あまり他人のことに関心がないんだね。自分に関心のある他人のことは、こっちも一生懸命眺めたり感心したりするけれど、法華経というものを自分の中に捉えて、自分が自信を持って

生きていくために、教義・教派というのは僕には必要ないんだ。だから、「あなたは何宗？」と聞かれたら、「私は石原宗です」と答えるね。

(五木)本当はみんなそうでしょう。そこから出発する。

(石原)自分の生き方を肯定するために、お釈迦さまというのは勝手に咀嚼できて非常に都合がいい。だから本を書いたのも、別に人に法華経を勧めるつもりで書いたのではないんです。/ただ、五木さんや僕の本がこれだけ読まれるということは、やはり社会的に本質的なニーズというものがなかったらあり得ないことだし、世の中にここまで来てしまったら本当に危ういぞ、という思いが世間にあるんだろうね。」

もう、コメントは差し控えます。皆さんご自身で判断下さい。

ただ、ここでは、「自力か他力か」が表題として付けられていますので、以下、この問題に私なりの解説をしておきたいと思います。

「他力」という言葉は、4〜5世紀頃活躍した世親(バスバンドウ)という人が書いた『浄土論』に、凡夫を超えた彼方にある絶対の仏の力を現すものとして、はじめて出てきたようです。これに対して、従来の修行の方法を「自力」というようになったといいます(堀一郎



・中村元・北森嘉蔵著『宗教を語る』（東京大学出版会刊）による）。

その後、浄土教の発展の歴史のなかで、他力ということが強く主張されるようになりました。中国では残っていました。特に日本に来て、自力の修行はすべて捨てられ、ただ阿弥陀仏（の本願）に帰依する、ということが大切にされるようになりました。

しかし、現代のような時代になってみますと、仏に帰依して、心から仏を信じることすら、できる人が極めて稀になってしまっています。坊主すらが、私には、そうできていないように思えます。

いくら他力と言ってみても、全てを仏さまにおまかせして生きようとする意志は、自己を否定するという、自分自身の主体的な生き方に関わっているのです。そこには、私の理論で言いますと、他己の尊重が要求されているのです。しかし、いま見ましたように、大多数の人は、自己を肥大させて、仏は、自分の生き方を肯定するために利用するだけのものになってしまっているのです。

自己を否定することのない宗教など、自己主張・満足的手段にかなり得ません。仏さまに全てをおまかせすることは、実は、他者のために生きることの意味しているのです。浄土系の宗派が、いちばん気をつけなければ

ならないのは、大乘仏教がめざした他者性を欠くことにならないように警戒することです。他者のために生きる契機（意志）を欠くとき、それは、宗教性を失い、エゴ追求の俗な、いわば取引になりさがってしまうのです。

ところで、最後に、私の「自己・他己双対理論」でこの問題を検討しておきます。私の理論でいいますと、自力は「自己」の働きに、他力は「他己」の働きに、それぞれ属しています。いつも言いますように、現実の生活は、この自己・自力と他己・他力との弁証法的統合として営まれています。

どんな宗教、宗派であっても、この両者の契機のどちらを欠いても、真の宗教にはなり得ないのです。

私の理論で言いますと、自力は、無意識の、生きる力の反映として、「自分自身を知ることをめざして、より善く生きようとする力」ですし、他力は、無意識の、人を求め・愛する力の反映として、「法をめざして、より善く社会的であろうとする力」です。

この他己の働きを重視するところに、大乘仏教の大乘仏教たるゆえんがあります。もちろん、釈尊が法を説かれたのは、他者・衆生の精神的救済のためだったので、僧団では、はじめは釈尊の境地に達することが、最重視されたため、自力が重視されたのだと思います。

## 釈尊のごとば（八一）

法句経解説

（二八〇）起きるべき時に起きないで、若く力があ  
るのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠  
情でものうい人は、明らかな智慧によって道を見出  
すことがない。

この偈に書かれていることは、まったく当然至極であ  
って、特に難しいと思える言葉はありません。でも、こ  
の偈の含む意味は、人生にとってとても大事なことです。  
偈には「若く力があるのに」とありますが、これは何も  
若い人に限られません。どんなに歳をとっても死ぬまで、  
この偈の教えは大切だと思います。

この偈の主題は、「怠りなまけていては、道を見出す  
ことができない」ということです。

私は、人生は、「自分を知ることをめざして、より善  
く生きようとする働き（自己）」と、「法（道）をめざ  
して、より善く社会的であろうとする働き（他己）」の  
バランスで営まれるもの、と考えています。

この二つの働きが、完全に統合されるとき、人は怠け  
ようという気持ちを全く起こさないでいることができる

のですが、そこに至らないときには、どうしても人は易  
きに流されていきます。自分をコントロールすることが  
なかなかできません。「意志や思考が薄弱」になって、  
しなければいけないと思っても、その通りすることがで  
きないものです。

実は、人間が自己に閉じるほど、このコントロールは  
難しくなっていくます。逆に、社会的な場に置かれるほ  
ど、それが易しくなっていくのです。ということは、他  
己の働き、あるいはそれと自己とのバランスが大切にな  
ってくる、というわけです。（難しく言いますと、その  
働きは、私の理論では、意識としては、「精神」の「自  
我・人格」機能領域で営まれます）。

現代人は、多くは自己に閉じていますので、全体とし  
て自己コントロールが困難になっています。いま、子ど  
もたちが「切れる」のが、話題になっていますが、切れ  
るのは何も子どもに限ったことではないのです。

私が勤める大学でも、切れる人がいっぱいいます。ま  
た、「怠け」とそれを「ごまかす」「ごますり」とは、目を  
覆うばかりです。悲しいかな、それは、最も他己の働き  
が求められる（大学）教員が、他己を最も萎縮させてい  
ることを示しています。

最後に、偈に「明らかな智慧によって」という言葉が

出ていますが、この智慧は、自己と他己とのバランスや統合に関係するものでして、単なる認知・言語機能の知識とは異なることに注意しなければなりません。

(二八一) ことばを慎み、心を落ち着けて慎み、身に悪を為してはならない。これらの三つの行いの路を淨くたもつならば、仙人(「仏」)の説きたもつた道を克ち得るであろう。

この偈の主題は、「三つの行いの路を淨くたもて」ということです。

私は、かつて、次のような詩を、第一巻六月号にのせました。

「人間の業の深さ」

多くの人はノ／行ってはならないことを行いノ（不殺生・不偷盜・不邪淫）ノ行わなければならぬことを行わないノ／言ってはならないことを言いノ（不妄語・不綺語・不悪口・不兩舌）ノ言わなければならぬことを言わないノ／思ってはならないことを思いノ（不慳貪・不瞋恚・不邪見）ノ思わなければならぬことを思わないノ／人の業のなんと深いことよノ／ヨーガをしようノそして業から救われ

よう

なお、カツコの中は、十善戒です。

この詩は、そのまま偈の主題と合致するものです。

偈の三つの路のことは、短く「身口意(しんくい)」と呼んでいます。これらは、私の「人間精神学」の理論では、感覚・運動、認知・言語、情動・感情の働きに対応しています。そして、こうした偈や詩を読んで、偈にありますように、「ことばを慎み、心を落ち着けて慎み、身に悪を為ささないようにしよう」と思うことは、自我・人格の働きと言えるのです。(なお、唯識という仏教理論では、それを、マナ識と言っていますが)。

でも、人間の悲しさで、どれほど自我・人格でそう思ってみても、すべきだと思ふ善は為せず、してはならないと思ふ悪を為してしまうのです。悲しいかなです。

その悲しさを救うものは、私の詩にありますように、ひたすらな(ヨーガに代表される)修行なのです。

無意識の「生きる力(煩惱)」を、意識して制御することは、不可能です。人間は、成長の過程で生きる力への執着を強めていきますが、それは、ますます人間を悲しい存在へと追いやることになっています。それを克服する道は、聖者の教えを求め、信じて、ひたすら修行する以外にはないのです。

後記

一、家の周辺では、もう田植えも終わりかけています。庭の竹が新芽を吹きだして、とても清々しく新鮮です。

二、正法眼蔵「現成公案」の解説は、難しいでしょうか。前回も難しかったようですが、今回も、そうだったかもしれません。私としましては、精一杯、易しくと思って書いているのですが、限界のようです。申し訳ないのですが、何度も何度も読みなおしてみたいと思いません。必ず、くみ取って頂けるものがあるのではないのでしょうか。もっと難しく書かないと「ありがたみ」がないのかもしれない。でも、私としましては、簡潔で分かりやすく書くことを宗（むね）としています。日本語はとてもよくできた言葉で、いくらでも曖昧に書くこともできますし、どこまでも明快に書くこともできます。三、三年に渡って作らせて頂いていました畑をお返しすることになり、その替わりを探しています。うまくいけばいいのにと念じております。

四、いま、大乘起信論やそれに関連した唯識思想、如来蔵思想などの本や、「平等」に関連した憲法や社会思想の本などを読んでいます。

五、平等に関する本を読めば読むほど、今の民主主義や憲法の思想の欠陥を思い知らされます。

六、十六世紀に至って、世界は「自己社会」に入りましたが、その出発点となった自己の権利の主張に未だに、世界中が振り回されています。その一番の欠点は、晩年に、政治学者・丸山真男が言いましたように、「他者性の欠如」にあります。私の理論でいいますと、それは、「他己」の縮退であり、萎縮です。

七、私は、その回復（いまはやりの言葉で言いますと、復権）をもたらす哲学を、既に示していると思っておりますが、でも、それを憲法や民主主義の思想に即して、述べるのが、皆さんに理解して頂ける早道と思ひ、その論文を書きたいと思っております。

月刊 こころのとも 第十卷 六月号 （通巻 一一四号）	平成十一年六月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

